

Journal of Kyoto Association of Jewish Thought

No. 9 June 2018

Foreword

Masato GODA : "Trouble dans le genre" 1

Articles

- Koji OSAWA : Biblical Interpretations of Judaism and Syriac Christianity in the
Antiquity—The Case of the Images of Moses in the Golden Calf Story5
- Kaori SATO : The Significance of Biblical Narration in Rosenzweig28
- Hiroyuki TAKANO : Of the Eros in Emmanuel Levinas's Totality and Infinity
—an interpretation of "Beyond the Face"—49
- Kenji KANNO : Was there a plan for Jewish extermination in Shanghai under
Japanese military rule? —Around Mitsugi Shibata and Josef Meisinger— ... 68

Symposium "Renaissance, Humanism, Reformation and Judaism
—500 years after Luther's 95 Theses" 91

- 1 : Tetsuyuki SEKI : Jewish Migration from the Iberian Peninsula in the Medieval
and Early Modern period94
- 2 : Kenichi NEJIME : The Italian Renaissance and Jewish Thought : especially about
Leo Hebraeus and Giovanni Pico107
- 3 : Mika MURAKAMI : Luther and the Jews : Recent research and new perspectives
..... 122
- 4 : Isaiah TESHIMA : Renaissance, Hebraism, and the Rabbinic Bible of 1517 ... 139
- 5 : Gengo ITO : Erasmus, Rabelais and the Jews154



京都ユダヤ思想

Journal of Kyoto Association of Jewish Thought

- 【巻頭言】 合田 正人 トラブルメイカー
- 【論文】 大澤 耕史 古代世界のユダヤ教とシリア・キリスト教の聖書解釈
—金の子牛像事件のモーセ像を例として—
- 佐藤 香織 ローゼンツヴァイクにおける聖書物語の意義
- 高野 浩之 エマニュエル・レヴィナス『全体性と無限』におけるエロス論
—「顔の彼方」の一解釈—
- 菅野 賢治 日本軍政下の上海にユダヤ絶滅計画は存在したか
—柴田貢とヨーゼフ・マイジンガーの周辺—

第十回学術大会シンポジウム

ルネサンス・人文主義・宗教改革とユダヤ —ルター「95箇条の論題」500周年

- 【報告】 関 哲行 中近世イベリア半島におけるユダヤ人（マラーノ）の移動
- 根占 献一 ルネサンスにおけるユダヤ思想の世界
—レオーネ・エブレオとジョヴァンニ・ピーコを中心に—
- 村上 みか ルターユダヤ人理解
—近年の研究における新しい視点より—
- 手島 勲矢 宗教改革とラビ聖書：16世紀ユダヤ文献学の意義
- 伊藤 玄吾 エラスムスからラブレールへと至る人文主義の一潮流とユダヤ



<論文>

日本軍政下の上海にユダヤ絶滅計画は存在したか

——柴田貢とヨーゼフ・マイジンガーの周辺——

菅野賢治

はじめに

オーストラリア、シドニー・ユダヤ記念館のある一角には、1940年のリトアニアで、いわゆる「命のヴィザ」の発給により数千人のユダヤ難民を救った杉原千畝の写真と並び、やはり戦時期、中国の上海に滞在・滞留していた二万数千人規模のユダヤ人を絶滅政策から救った日本の「義人」として、Shibata Mitsugi の写真が掲げられている(2016年8月現在)。筆者が同館を訪れた日、居合わせた日本人観光客とおぼしき人々は、杉原の顔を既知として確認しながらも、他方のShibataについては、いかにも怪訝そうに、その肖像と解説を代わる代わる眺めていた。



晩年の柴田貢(トケイヤー、シュオーツ『河豚計画』ならびにシドニー・ユダヤ記念館の展示に用いられた写真)

筆者自身は、かつてマーヴィン・トケイヤー、メアリー・シュオーツによる共著『河豚計画』(1979年)のなかで柴田貢の名を目にした覚えがあった。帰国後、同書を確認してみると、シドニーの記念館に掲げられていた柴田の写真は、やはり『河豚計画』のなかで使用されているものと同一で(前頁写真)、おそらくその複製なのだろうと察せられた。さらに、この機に上海を経由した元ユダヤ難民たちの回想録や内外の歴史家たちによる研究書をいくつか繙いてみると、『河豚計画』以降に書かれたものの実に多くにおいて、1942年夏、上海には、SS大佐ヨーゼフ・マイジンガーの肝いりによるユダヤ絶滅計画が存在し、その「最終的解決」の具体的方策とは、(一)ユダヤ人らを廃船に乗せて東シナ海に連れ出し、日本海軍の砲撃によって沈める、(二)上海郊外の岩塩の鉱坑で死ぬまで働かせる、(三)揚子江の河口に収容所を作り、生体実験のモルモットにする、というものだったこと、そして、この残忍な施策提言の場に居合わせた柴田貢が、みずから外交官の職を投げ打ってまでそれを頓挫させ、機密漏洩のかどで悪名高き「ブリッジ・ハウス」の日本憲兵隊の監獄に留置された末、職を解かれて本国に強制送還されたという記述が、トケイヤー、シュオーツの書物を典拠として継承されている(トケイヤー/シュオーツ1979:209-212)。

これまで、柴田貢の存在が日本の公論の場で採り上げられたことは、筆者が把握している限り二度あり、一度目は柴田が他界した翌年、1978年の『サンケイ新聞』、二度目は、戦後51年を経た1996年、杉原千畝のほかにもう一人、ユダヤ難民たちの知られざる恩人が上海にもいたという文脈で、『東京新聞』が大きく報じている¹。他方、日本の内外を問わず、マイジンガーと柴田をめぐる逸話の史実性に疑問を払拭できない書き手たちは、従来、「あくまでも伝承にすぎない」とした上でそれに言及するか、あるいは当初からこの逸話には触れずに済ませるか、そのいずれかであった²。

¹ 山田進一「上海難民事件——ユダヤ人救った元日本外交官」、『サンケイ新聞』1978年8月5日。榎本哲也「ユダヤ人救ったもう一人の日本人——戦時下の上海 外交官生命かけて ナチス虐殺案 難民側に伝える」、『東京新聞』1996年1月4日。いずれも柴田夫人、道子氏の提供による。

² 戦時期、上海のユダヤ人社会をめぐって、日本における先行研究は、主として丸山直起(明治

かくして、第二次大戦期のヨーロッパにおけるユダヤ教徒・ユダヤ人の絶滅政策に関する研究が、日本語でも、年々、充実の一途を辿る一方、こと日本の膝元、日本軍政下に置かれた昭和17年の上海に、同種の絶滅政策が、たとえ未然の計画としても存在したのか否か、という歴史の問いには、いまだ信頼に値する定説がない。その間、慎重な歴史研究の水準はさておき、元ユダヤ難民たちの回想録、歴史ジャーナリズム、記念館の展示などの水準では、トケイヤー、シュオーツの『河豚計画』に描かれた筋書きが、あたかも立証済みの史実であるかのごとく流布し、そのことに無知、無頓着なのはもっぱら日本の研究・言論界のみという状況——端的に言い換えれば、Shibata Mitsugiの名が、Shibota, Mitsuguといった誤記もろとも、アルファベットのインターネット上に溢れているのに対し、「柴田貢」と漢字で検索してもまったくヒットしてこないという、まさに「灯台もと暗し」的な状況——が出来している。

戦時期上海におけるユダヤ絶滅計画の存否をめぐる、これまで日本語はもとより、英語、ドイツ語、イディッシュ語、ヘブライ語、フランス語などで数多く書き継がれてきた文献を渉猟しながら、筆者自身が感じ取っているのは、その事実関係の追跡に有効なのは、今現在から1942年にまで「遡って」いくよりも、むしろ逆に、時間的に後代に属する書き物はいったん知らなかったことにし、1942年から時間を「流れ下り」ながら、時期が明確に特定できる証言や状況証拠を時系列上に位置づけ直すこと

学院大学)、阿部吉雄(九州大学)、関根真保(京都大学)の三氏によって蓄積されてきた。本稿の筆者がこれら三氏全員にお目にかかって見解をうかがったところ、三氏とも、この柴田とマイジンガーをめぐる逸話の史実性を裏づける一次資料をいずこでも目にしていないことから、「そのようなことがあった、と一般に述べられている」として、既存の外国語文献の記述に慎重に言及する立場を取っておられることが確認できた。

なお、戦時期上海におけるユダヤ居留民と日本当局の関係に関する研究の権威、デイヴィッド・クランツラー(1930-2007)は、その主著の註のなかで(Kranzler 1976: 506, note 9)、マーヴィン・トケイヤーが、戦後、アブラハム・コーンに行ったインタビューの録音テープに言及している(そのなかでコーンも、マイジンガー主導の絶滅計画の存在に言い及んだものと推測される)。しかし、「語られていないことがあまりに多く、また、ほかの点、とりわけ人名があまりに不正確であるため、これらの録音テープを十全に活用するためには、さらなる調査が求められる」とし、クランツラー自身、同書のなかでマイジンガーの名前に言及することを慎重に回避している。

ではないか、ということだ。その作業はいまだ道半ばであり、考え得る資料調査をやり尽くしたわけではないが、現時点での筆者の推論を次のようにまとめておく。すなわち、戦時期、日本軍政下の上海に滞在・滞留していたユダヤ住民を工業的に抹殺しようとするナチス式の絶滅計画が何らかの仕方で存在したとしても、それは、(一)マイジンガーを筆頭に、たしかに上海にも出沒していたSS幹部の禍々しい発想と乱暴な発言、ならびに(二)そうした発想・発言に同調してみせることにより、上海ユダヤ住民の処遇についてより厳格な措置を現地の軍政当局に講じさせようとした一部の日本人の姿勢、そして、(三)それらについて飛び交う噂を耳にした当のユダヤ住民たちが、ヨーロッパから断片的に届く身の毛のよだつような情報との兼ね合いにおいて、当然、抱いても無理はない恐怖心、これら三つ巴の想像界のうちに宿っていたのであり、ドイツ側からマイジンガーなどを介して日本軍政当局に持ちかけられ、日本側も受け入れ寸前まで歩を進めた現実の計画などとしてではなかっただろう、ということである。

柴田貢について

まずもって、一般に1942年7月頃、東京からやってきたマイジンガーが上海の日本当局に持ちかけたユダヤ絶滅計画を現地のユダヤ代表者たちにリークし、すんでのところでその実現を阻止したとされる柴田貢は、いかなる人物だったのか? 以下、柴田夫人、道子氏による情報提供、ならびに若干ながら外務省外交史料館に保存されている柴田の個人履歴をもとに、これまで一度も詳らかにされたことのないその人物像を描き出しておく³。

³ 2017年2月、筆者のインタビューに快く応じてくださり、以来、電話、書簡でもさまざまな資料・情報を提供してくださった柴田道子氏に、心より御礼申し上げます。道子氏は、戦後、日本で柴田と出会い、結婚なさったため、上海時代の彼の職務や活動を直接知っておられるわけではないが、生前の柴田が上海について語っていたことを、筆者にあますところなく伝えてくださった。以下、外交史料館が所蔵する柴田貢の個人履歴は、筆者が柴田夫人の同意のもとで閲覧したもの

柴田貢（みつぎ）は、1910（明治43）年7月2日、兵庫県揖保郡東栗栖村（現・たつの市新宮町）に生まれた。地元の小学校を終え、県立明石中学に進学した彼は、そこで英語教師からの感化により、将来、英語で身を立てる決意を固める。年号は不明ながら、東京外国語大学に入学して英語を専攻し、同大学の英語ネイティブ教員の薦めに従ってアメリカに留学。1933（昭和8）年8月、テキサス州立大学で学士号を取得して帰国した。

同年同月、外務省に採用された柴田は、書記生としてまず中国の長沙に送られ、次いで1935（昭和10）年6月、ハルピンの日本総領事館に赴任した。翌年、いったん本省へ帰還したのち、1937（昭和12）年2月、今度は香港の日本総領事館での勤務を命じられた。しかし、1938（昭和13）年5月、本省に戻った柴田は、同年8月9日付けで当時の外相・宇垣一成宛の辞職願を提出し、外務省を辞している（以上、外交史料館所蔵の柴田貢個人履歴より）。

たしかに、柴田自身がのちに作成した履歴書には「昭和一三、八 在上海日本総領事館勤務」との記載があり、これまで上海時代の柴田に言及するすべての文献においても、彼が1942（昭和17）年夏に起きた一連の騒動に、上海日本総領事館の館員（多くの記述において「副領事」として関わった、とされてきた。しかし、内閣印刷局刊行の『職員録』（アジア歴史資料センター所蔵）昭和15、17、18年版のいずれを繰ってみても、上海総領事館の欄に柴田の名前は見当たらず、やはり昭和13年の辞職願が示すとおり、上海時代の柴田は、総領事館に正規職員として所属していたのではないことが裏づけられる。

この点について、現時点では以下のように解釈するほかなかるう。つまり、1938（昭和13）年初め、なんらかのルートを通じて、香港の総領事館在勤の柴田に対し、前年11月、日本が軍事掌握を完了した上海に設置されることとなった特務機関への就任要

である。

請があり、柴田はそれを受諾した。5月、日本に戻った彼は、8月9日付けで外務省を辞し、同時に特務機関員として上海に着任して、現地の日本総領事館には、犬塚まよ子『ユダヤ問題と日本の工作』中の氏名一覧に見えるとおり、「外務省経済嘱託」として関わることとなった（犬塚1982：397）。それでも、特務機関員がみずからその肩書きを公言することほど不用心なことはないため、日頃、周辺に対しては「総領事館員」を名乗り、のちに作成した履歴書の上でもそれを踏襲したと思われるのだ。

いずれにせよ、1942年夏の騒動に柴田が関わったのは、正規の外交官——ましてや上海総領事館の「副領事」——としてではなく、表向きは外務省の嘱託、内実としては、当時、犬塚惟重から実吉敏郎に責任者が交代したばかりの海軍武官府特別調査部の関係者としてであった、という細部を押さえておくことは重要である。それにより、従来、戦時期上海のユダヤ居住地研究の権威、デイヴィッド・克蘭ツラーが数名の元ユダヤ人居住者たちの回想を根拠としてまとめ上げたように、「副領事」たる柴田が、みずから取った行動により「領事職」を解かれ、日本に「送還された」という記述（Kranzler 1976：479）が、必ずしも事態を正確に映し出すものではなかったことが判明するからだ。

時期は不明ながら、1942年夏の騒動の後に日本へ戻った（必ずしも「送還」されたとは限らない）柴田は、本人作成の履歴書によれば1944（昭和19）年3月、青島の日本総領事館に配属された（外務省の個人履歴にその形跡が見当たらないことから、おそらく嘱託として）。柴田夫人の記憶によると、そこには、かねてより柴田に目をかけていた外務省の先輩、木村四郎七（1902-96）、ならびに当時の青島領事、伊関佑二郎（1909-99）の取り計らいがあったようだ。いずれにせよ、1942年夏、上海での出来事によって外交の世界における柴田の立場が失われてしまったわけではなく、「柴田はさんざん体罰をうけたうえ二度と中国大陸を踏んではならぬとの厳命つきで日本へ送還されてしまった」という『河豚計画』の記述についても（トケイヤー／シュオーツ 1979：219）、「体罰」はさておき、「二度と中国大陸を踏むな」という「厳

命」（そもそも、そのような命を発する主体は誰であり得たか？）は、必ずしも現実
に即したものはなっていないわけである。

1945（昭和20）年、青島で終戦を迎えた柴田は、進駐してきたアメリカ軍に英語力
を買われ、その後しばらく米軍機で中国各地を連れ回されては、通訳として日本の敗
戦処理を手伝わされた。日付は不明ながら、日本への引き揚げも米軍機に同乗しての
ことだったという（柴田夫人の回想）。しかし、1946（昭和21）年1月、引き揚げ間
もない柴田に、戦犯容疑者として巣鴨刑務所への出頭命令が届き、そこから一年、同
刑務所に勾留された末、翌47（昭和22）年1月、身柄をイギリス軍に移され、香港
のスタンレー収容所に移送されることとなった⁴。当時、東京で戦犯容疑者の取り調べ
を主導するアメリカ軍に対し、中国南部や東南アジアにまつわる件については香港の
イギリス軍が被疑者の身柄引き渡しを要求する、ということが行われていた⁵。柴田夫
人によると、巣鴨でも、スタンレーでも、自分の罪状は一体何なのか、と問う柴田に
対し、「詳細は言えぬが上海に関することだ」との答えしか返ってこなかったという。
また、スタンレーでは、自身に対する厳しい尋問に加え、ほかの日本人拘留者らの拷
問、処刑、自殺など、凄惨な場面に、多々、立ち会わされたようで、その後の生涯を
つうじ、夜中にうなされ、汗だくとなって目を覚ましては、「またスタンレーの夢を
見た」とこぼすことがしばしばあった。

柴田夫人の回想によると、あらぬ戦犯容疑を晴らしてスタンレーから釈放されるま
でにも、外務省の先輩、木村らの奔走があったという。ふたたび帰国後、本人作成の

⁴ 国立国会図書館憲政資料室蔵マイクロフィッシュ「Sugamo Prison : GHQ/SCAP Records, Assistant Chief of Staff, G-II 連合軍最高司令官総司令部参謀第二部文書」、「Shibata Mitsugu [sic]」の項。

⁵ イギリス軍による日本人戦犯容疑者の取り調べ、裁判、処刑が行われた香港のスタンレー収容所については下記を参照。大澤大作、大澤愛子『夫婦のよせ鍋』サンパウロ新聞社、1965年。仲山徳四郎『私記 香港の生還者』、著者出版、1978年。後者には、1947年1月12日の日記の記述として、「午後五時半頃、またまた東京巣鴨より上海領事館関係者四名移送せられA組に収容せらる」（71頁）、同27日の記述として、「東京巣鴨よりまたまた五名来る。元上海総領事及び陸軍中佐一あり」（73頁）という文言が見える。

履歴書によれば1947（昭和22）年3月から翌々1949（昭和24）年11月まで、柴田は
「終戦連絡京都事務局」に勤務しているが、その業務内容は、やはり英語力を活かし、
戦中日本の要人たちのなかから公職追放に相当する人物を選び分けるアメリカ進駐
軍の作業を補佐することであったと思われる（その頃、京都で道子氏と知り合い、結
婚）。

終連での職務を終えた柴田は、大阪の新聞王、前田久吉により『産業経済新聞』の
外信部長に抜擢され、英語に堪能な海外特派員として活躍し始める。のちに参議院議
員となった前田が『産経』を売却するに及んで、柴田も退職するが、続けて日本航空
の社長室付顧問として再就職し、持ち前の英語力を航空部門でも発揮し続けた。

定年退職（おそらく1970（昭和55）年）後の柴田は、旧知の間柄であった元イギ
リス大使館参事官ハーバード・V・レッドマン（Herberd Vere Redman, 1901-75）と時々
会っては、酒を酌み交わしながら思い出話に花を咲かせていたという。1927（昭和2）
年来日し、はじめ東京商科大学（現・一橋大学）で教授を務めた知日家レッドマン
とは、柴田が東京外国語大学の学生だった頃から行き来があったらしく、1942（昭和
17）年、ちょうど柴田が上海でユダヤ人関係の騒動に巻き込まれていた頃、日本でス
パイ容疑をかけられ拷問を受けた経歴をもつレッドマンとは、柴田自身のスタンレー
体験もあわせて、理解し合えることが多かったのだろうと察せられる。

1976（昭和51）年、アメリカ人ラビ、マーヴィン・トケイヤーが柴田の所在を突き
止め、インタビューを行う。柴田夫人の記憶によれば、二、三日にわたって都内の某
所に招かれ、長時間のインタビューに応じるなかで、トケイヤーが、柴田が上海時代
に親しくしていたユダヤ出自の人々の連絡先を世界各地に次々と探し当て、国際電話
をつないで話をさせてくれたことを大いに喜び、また、その連絡網の精度に驚いて帰
宅していたという⁶。

⁶ トケイヤー、シュオーツ『河豚計画』の冒頭部、「柴田氏と対座して問答すること数時間、テー
プを取り換え取り換えしながら…」というくだりから、トケイヤーは、この時、柴田へのインタ

1977年12月22日、食道ガンにより死去。享年67歳であった。

ヨーゼフ・マイジンガーと上海

では、いま一人、1942年夏の上海で起きた事件のドイツ側の中心人物として、トケイヤー、シュオーツの『河豚計画』以来、数多くの文献に名前を引かれてきた「ワルシャワの屠殺人」こと、駐日ドイツ大使館付警察武官ヨーゼフ・マイジンガー（Josef Meisinger, 1899-1947）の方はどうか？

1899年9月14日、ミュンヘンのカトリック家庭に生まれたヨーゼフが地元のギムナジウムを卒業したのは、まさに第一次大戦たけなわの頃であった（以下、マイジンガーの経歴は Frey Eisen 2000 : 462-466 による）。1916年12月、みずから志願して西部戦線に赴いた彼は、軍功を立てて負傷し、二級鉄十字章を授けられる。そして戦後のヨーゼフは、同時代の多くのドイツ青年の例に漏れず、屈辱的なヴェルサイユ体制に対するやり場のない思いから極右の急進思想に突き進んでいく。1922年、ミュンヘン警察に職を得た頃には、すでにヒトラーの熱烈な信奉者になっていた。翌23年11月の「ミュンヘン一揆」に加わり、正式なナチ党員となった彼の警察内部での地位は、党そのものの台頭に合わせて上昇し、ほどなくヒムラー、ハイドリヒらの目にも留まるようになる。1934年、ゲシュタポ政治警察部長に就任したハイドリヒの推薦によりベルリンのゲシュタポ本部へ着任。以後、マイジンガーの主たる任務は、ナチ党内の反ヒトラー派を告発し、人工中絶、同性愛、ユダヤ出自の人間との交際といった「不法」行為を摘発することにおかれた。

1939年、ドイツのポーランド侵攻にともない、ワルシャワ保安警察及びSD指揮官を任せられたマイジンガーは、その後一年半の任期のあいだ、多数のポーランド人（と

ヴェューを録音していたものと思われるが、そうしたテープの存否を確認し、もしも存在する場合、それを後続研究の糧として役立たせて欲しいと懇願する筆者からトケイヤー氏への二度にわたるメール（2016年12月、2017年2月）には、その後も（2018年4月現在）返答が寄せられないままである。

りわけユダヤ系）の虐殺に関わり、いつしか「ワルシャワの屠殺人（Schlächter von Warschau）」の異名をとるようになった。戦後、彼に死刑判決を言い渡すこととなる裁判においては、彼がワルシャワ在任中、アウシュヴィッツに送り込んだ人々の数が3,371人と算定されている。

そのマイジンガーが、1941年初め、いったんベルリンに呼び戻され、同4月、東京のドイツ大使館付警察武官として着任することとなった経緯について、確たる物証はともなわないが、彼の日頃の高慢な態度と用いる手段の残虐さにうんざりし始めていたヒムラー、ハイドリヒによる左遷、厄介払いであった、とする説が一般的である（ヴィッケルト 1991 : 20）。確かなことは、彼の日本における任務が、特高警察として協力して在日ドイツ人集団のなかに反ナチ、反ヒトラー分子と疑われる人物を嗅ぎ分けることであり、実際、彼の存在は、オイゲン・オット駐日大使をはじめ、周囲のドイツ人たちから疎まれ、恐れられていたということだ（上田／荒井 2003 : 152）。

われわれの主題にとって興味深いのは、1941年4月、日本に到着したばかりのマイジンガーが、早々に上海に目を向け、翌5月、一回目の上海出張を行っている点だ。そして、その目的は、日本軍政下に置かれた上海、南京に住むドイツ人たちの挙動を探るための現地情報網の敷設と並び、上海で仏教の僧院を営む神秘思想家トレビチュ＝リンカーンとの膝詰め談判であった。

ハンガリーの正統派ユダヤ教徒の家門に生まれ、ロンドンでキリスト教に改宗したトレビチュ・イグナーツ（Trebtsch Ignác, alias Trebitsch-Lincoln, 1879-1943）は、いつしかアメリカ第16代大統領への崇敬の念から「リンカーン」姓も併せ名乗るようになった。カナダではユダヤ教徒向けのプロテスタント宣教師、イギリスでは自由党の上院議員、ルーマニアでは石油事業主、オランダとアメリカではドイツの密偵、ドイツでは「カップ一揆」の支持者と、まさに『怪盗ロカンボルの冒険』を地で行くような前半生を過ごしたトレビチュ＝リンカーンは、1920年代後半、中国に流れ着く。そこで神秘体験を得て仏僧となり、「照空」と名乗るようになった彼は、上海にみずか

らの僧院を設立し、帰依してくる門徒たちの私財を糧として暮らすようになる。1937年、日本による上海掌握ののち、親日=反英のプロパガンダ要員となり、第二次大戦勃発後にはナチスとも結んで、ヒムラー、ヘスらの要請のもと、東アジアの仏教徒に対する親独=反英宣伝工作への協力を約束するにいたっていた。

1941年5月15日、マイジンガーが上海のドイツ総領事館からベルリンの国家保安本部に宛てた電報では、彼が照空ことトレビチュ=リンカーンと長い会談を行い、以後、照空の存在がアジア帯の仏教徒たちに及ぼす吸引力により、中国、チベット、インドの全域を強力な親ドイツ圏としてまとめ上げるという壮大な計画が練られたことが報告されている (Freyeisen 2000 : 467)。

しかし、マイジンガーが極東着任早々に取ったこの率先行動は、いかにも時宜の悪いものであった。というのも、5月10日、本国ドイツではルードルフ・ヘスが、独断でイギリスと和平協定を結ぶとして小型機でドイツを飛び立ち、スコットランドに不時着するという事件が起きていたからだ。国家保安本部が、この醜聞をヘスの心神喪失に帰しつつ火消しに追われていた頃、ほかでもない、トレビチュ=リンカーンを利用してアジア仏教界の抱き込みを図るというヘス主導の宣伝工作案を推進しようとするマイジンガーのスタンドプレーは、ベルリンの本部にとって響盞の種以外の何物でもなかった。

そもそも、マイジンガーからベルリンへの打電を依頼された上海ドイツ総領事マーティン・フィッシャーが、その内容に驚き呆れ、別途、ベルリンの本省に打電して注意を促しているように、当時、すでに上海のドイツ代表部のあいだでトレビチュ=リンカーンの評判は地に落ちており、アジア全域の仏教徒に対する霊的影響力なるものも、トレビチュ=リンカーン一流の誇張癖によるものであることが見透かされていた。ベルリンでは、リップントロープ外相から国家保安本部長官ヒムラーに対し、マイジンガーの上海での行動について照会要請があったらしく、5月26日、ヒムラーがハイドリヒに託してマイジンガーに打電した訓告にはかなりの苛立ちの様子が読み取れ

る。「貴君は警察連絡指揮官として義務づけられた事案に従事すべきである。外交的な事案に関する報告は貴君の権限ではない。よってトレビチュ=リンカーンの件において貴君は何事も委託されていないのだ。しかも、その男がユダヤ人であることくらい、貴君は十分に知っていてしかるべきである。」(Freyeisen 2000 : 468) 先述のとおり、マイジンガーが東京に出されたのが、すでにワルシャワ時代、彼がヒムラー、ハイドリヒの不興を買うようになっていたためかどうか、定かではないが、少なくとも41年5月、彼の上海での軽率な行動が、これら二人の最高上司の目に大きな減点要素として映ったことは間違いない。

続けて東京におけるマイジンガーの評価をさらに下げる方向に働いたと思われるのが、有名なゾルゲ事件である。コミンテルンの密偵として、1941年9月末、まず数名の日本人容疑者の逮捕から始まった事件は、10月18日、『フランクフルター・ツァイトUNG』紙の記者リヒャルト・ゾルゲら、ドイツ人容疑者検挙の報をもって内外に大きな衝撃を与えた。まさにゾルゲのような人物の正体を暴き、本部に報告することをもって本務としていたはずのマイジンガーが、日頃からゾルゲと親しく交わり、ドイツ側にも日本警察にも彼の人となりについて太鼓判を押していたにもかかわらず、事件後、大使館付警察武官の地位を危うくされずに済んだのが不思議なほどである。史家フライアイゼンも、この時、マイジンガーが責任回避のために持ち出し得る言い訳としては、ゾルゲが逮捕された時、彼が二度目の上海出張のため東京を留守にしていたということくらいだったろう、と述べている (Freyeisen 2000 : 469)。

ここで、日本在任中のマイジンガーと上海の関係をめぐり、きわめて興味深い戦後資料がある。1945年9月、上海に進駐してきたアメリカ軍が、当時、現地で看護婦として働いていたマイジンガーの妻に行った聴取の記録が、アメリカ中央情報局 (CIA) の古文書として保存されているのだ⁷。

⁷ NA, RG 226, Entry 182-A, Box 9, Folder 69, Office of Strategic Services, China Theater, X-2 Branch, Report on Catherine Queszuweit-Packheiser (Meisinger), Shanghai 29.9.1945.

マイジンガーには、日本赴任の直前にベルリンで結婚し、東京に伴ってきたカテリーネ（旧姓クエスツヴァイト＝パックハイザー、Catherine Queszweit-Packheiser、生没年不詳）という妻がいた。調書のなかで彼女自身が述べているところによれば、1931-33年、ウィーン警察でタイピストとして勤務した彼女は、1933年以降、ベルリンのドイツ警察本部に移り、一時、ヒムラーの副官の秘書をつとめたこともあった。1936年から37年、ゲシュタポ本部で知り合ったマイジンガーとは41年2月に結婚したが、それは彼の東京赴任に同行するためだったという。しかし、東京で二人の仲は険悪となり、ほどなくカテリーネは離婚手続きに入った。43年5月～10月には、同居に耐えかねて一人で上海に住み、45年1月には、単身、上海に移り来て、現地ドイツ人居留地のある有力者の斡旋により、「ジェネラル・ホスピタル」の修道女宿舎に寝泊まりしながら同病院の看護婦として働くようになっていた。

調書のなかで、カテリーネは、元・夫のマイジンガーとナチ党に対する「憎しみ」をはっきりと表明し、連合国側がマイジンガーと彼の配下の諜報員たちに関して知りたいことについては喜んで情報提供すると述べている。ただ、マイジンガーが上海にやって来た時期と回数について、ある調査官に対しては、1941年の5月と9月、および1943年に一回、合計三回であったと答え、また別の調査官に対しては、1941年9月と1942年5月の二回であったと答えるなど、曖昧さを残す（他方、マイジンガー自身は、戦後の聴取に対し、彼の上海出張は41年の二回と44年6月、計三回のみであったと供述している）（Freyeisen 2000：470）。カテリーネによると、マイジンガーは、43年4月～5月、ハルピンにも出張した。上海、ハルピン、いずれの場合も、出張の目的は、現地在住のドイツ人たちの挙動に関する情報収集であったという。そして、われわれの最大の関心事たる現地のユダヤ居留民について、カテリーネは、「彼はユダヤ人亡命者たちの問題についても仕事をしていた」と簡単に付言するにとどめている（同：474、傍点菅野）。

他方、アメリカの調査官の側では、カテリーネがみずから逮捕を逃れるため、「ワ

ルシャワの屠殺人」たる夫との不和・離婚説を捏造している可能性も払拭できないとして、彼女の証言の真正さに疑いを残している。その際、アメリカ側はカテリーネの身辺調査も怠らなかつたようで、一部に彼女のことを「上海の女総統（fuhrerine）」（綴りは原文ママ）と呼ぶ人々もいたことから、彼女自身、実のところマイジンガー配下の諜報員であり、夫との不仲を装って足繁く上海を訪れては、現地のドイツ人共同体に取り入り、得られた情報を密かに東京の夫に送っていた疑いもある、というのだ。他方、「彼女を日本まで乗せていく潜水艦の話は、ほとんど根拠がないものと考えられる」と、ある調査官が記しているところから、翻って、マイジンガーとその妻がドイツのUボートで東京＝上海間を自由に行き来している、と噂されていたこともわかる。

こうして、このカテリーネ証言も、その曖昧さ、ならびに真正さへの疑念をもって歴史記述の素材になりにくいのだが、少なくとも、彼女の記憶、ならびにのちのマイジンガー本人の供述から、問題となる1942年夏にマイジンガーが上海にいたことが「裏付けられない」という結論は得られる。そして、アメリカ進駐軍がカテリーネについて作成した調書からは、なにがしかの事実関係よりも、むしろ、マイジンガーとその妻をめぐる、上海のドイツ人居留民（ユダヤ系、非ユダヤ系を問わず）のあいだに、ありとあらゆる噂が飛び交っていた様子が浮かび上がってくるのだ。

その先、終戦まで、マイジンガーが日本で発揮し続けた暴君ぶりについては他書に譲る（ヴィツケルト1991、上田／荒井2003）。1945年9月6日、河口湖の「富士ビューホテル」でアメリカ軍に捕捉されたマイジンガーは、そのままヨーロッパに空輸され、ワルシャワ時代の罪状をめぐる裁判にかけられる。1947年3月3日、死刑判決が下され、同7日に絞首刑が執行された。

元・妻カテリーネのその後に関する文献は、管見にして未見である。

1942年夏の出来事をめぐる五つの証言

1942年夏、上海のユダヤ居留者たちと日本軍政当局のあいだに柴田貢を挟み込むようなかたちで起きた出来事に関する最初の文字記録は、アメリカのユダヤ支援組織「ジョイント」の上海現地職員だったローラ・マーゴリス（1903-97）が、おそらく1943年か44年に作成したとおぼしき23葉のタイプ版報告書である⁸。

（証言1）それによると、マーゴリスは、1942年7月、ローベルト・ペリツというドイツ・ユダヤ人の訪問を受け、日本当局が、ユダヤ難民らを廃船に乗せて沖合に連れ出し、そこで船を沈める、という絶滅計画を進めているという情報を親しい日本人の友人からつかんだ（ここでマーゴリスは、この日本人の名を「Katawa」としているが、それが「Shibata」の記憶違いであることは明白である）。ペリツいわく、よって、このことを電報で「ジョイント」本部に伝えてアメリカ世論をかき立て、ユダヤ人が一刻も早く上海から脱出できるようにして欲しい、というのだった。この時、マーゴリスは、ペリツについて過去に芳しからざる評判を耳にしたことがあり、また、日本当局が、日米開戦（41年12月8日）、ならびにドイツとドイツ占領地出身のユダヤ人の国籍無効化（42年1月1日）といった事態をうけて、早晩、ユダヤ住民を特定の居住区に隔離することになるだろう、との情報を信頼できる筋から得ていたこともあって、ペリツの言い分を真に受けすることができず、彼からの要請に対しても、自分たちにはそのような世論喚起の行動を起こす権限も力量もない、としてやりわりと断ったという（第14葉）。

（証言2）次に、この騒動に身をもって立ち会った人々による証言として時期的にもっとも早いのは、まさに、当時、マーゴリスにこのような申し出を行ったペリツ自身が、出来事から10年を経た1952年に綴ったものである⁹。

⁸ Laura Margolis, 'Report of Activities in Shanghai, China, from December 8, 1941 to September 1943', JOINT Archives.

⁹ Robert Peritz, "The Japanese Proclamation" — An Affidavit, Testaments to the Holocaust, The Wiener Library Institute of Contemporary History, 11 Jan. 1952. 移住先のオーストラリア、シドニーで Robert

これによると、ある日、上海のユダヤ組織の代表者数名を集め、柴田貢を囲んで行われた秘密会合の場で、柴田の口から、ユダヤ住民に迫っている危険の所在が明かされたので、ペリツは、柴田に勧められるまま日本総領事——事実とすれば堀内干城（1889-1951）——に抗議の手紙を書き、「カセイ・ホテル」で行われたランチョンの際にそれを直に手渡した。ペリツはまた、ユダヤ組織の監視に当たるイノウエという日本人将校からも、とくにプットカマーというドイツ人が中心になってユダヤ人排撃の計画が企てられている、という情報を事前に耳にしていた。この時、イノウエは、自分が情報源であることは絶対に明かしてくれるな、と述べたという¹⁰。

（証言3）時系列の上で三番目に古い証言は、1962年、ハーマン・ディッカー『極東の放浪者と入植者』に収録されたジョゼフ・ビトカーの覚書である（Dicker 1962: 116-117、Kranzler 1971: 478-479）。

ビトカーによると、1942年8月のある日、「上海領事館の副領事」柴田（覚書原文では「Shibota」）が、ユダヤ組織のリーダーたちに、非公式かつ内密に以下のような内容を告げた。今、日本当局はドイツ領事館（とりわけプットカマー男爵）から、ユダヤ人、とりわけ難民たちを隔離するようにとの強い圧力をかけられている。ドイツ側は、上海の難民のほとんどがユダヤ人、すなわちヒトラーの敵であって、日独双方の敗北を強く願っているに違いなく、よってユダヤ人のサボタージュ行為に備えて彼らを厳重に監視しなくてはならない、と主張している。隔離の場所としては、揚子江河口の島と虹口地区の二つが検討されている。そこで、みずから反ナチの立場をとる柴田としては、ユダヤ・コミュニティが一致結束し、近い将来、実施されるかもし

Peritz が行い、署名した証言（Ristaino 2001: 180-181）。

¹⁰ この「イノウエ」なる日本人将校は未特定。いま一人、次のビトカー証言でも言及されている「プットカマー（Puttkammer ないし Putkammer）」は、綴り字に若干の異同を含みながらも、当時、上海ドイツ情報部部長の座にあったカール＝イエスコ・フォン・プットカマー（Karl-Jesko von Puttkamer, 1900-81）であった可能性が高い。この人物については、彼と上海で親しく交わった日本陸軍士官学校ドイツ語教官、高嶋泰二（1912-2011）の回想録『上海奇情』（求龍堂、1995年）と合わせ、稿を改めて論じる。

れない措置を少しでも柔和なものにすべく、可能な手段をすべて講じるべきと忠告した。

(証言4) 柴田を囲んでの会合に参加した数名のうち三名が残した証言のなかでもっとも詳細なものは、1963年、ニューヨーク、上海ティフィン・クラブで行われたフリッツ・カウフマンのスピーチを、のちに本人がドイツ語原稿として書き直し、『レオ・ベック研究所紀要』に掲載したものである¹¹。

カウフマンによると、1942年7月のある日、「欧州避難ユダヤ人救済委員会」のエリス・ハイムの事務所へ急遽、呼び出された彼は、仲間らとともに柴田の話を聞いた。柴田によれば、その前日、日本側のユダヤ問題担当当局が開いた会合の場で、ゲシュタポの圧力のもと、上海のユダヤ人全員を「清算する (liquidieren)」という決議がなされた。その具体的方法は未定であるが、ある者は、四万人ほどのユダヤ人を古い船に乗せて沖に連れ出し沈める、また別の者は、揚子江河口の崇明島に移住させ、餓死させる、などと提案した。

柴田いわく、日本側の新しいユダヤ問題担当当局は、ゲシュタポの息がかかった過激派の将校たちで構成され、軍内部の規定により、上層部の将校の許諾なくして、決定事項を実行に移すことができるようになっていたという。これを阻止するには、中支派遣軍の総司令官・松井石根、海軍大将、憲兵隊の司令官、ならびに東京の外務大臣などに直訴するしかない。そこで、仲間のうちで、誰が誰にコンタクトを取れるか、相談し、ロシア系ユダヤ人たちは、松井大将や東京の外務省の人脈に当たり、委員会秘書のペリツは、虹口に駐留している海軍将校たちに接触することとなった。

(証言5) 最後に、『永遠の異邦人——戦時上海のあるユダヤ家族』の著者レナ・クラスノの父が、1968年1月2日、イスラエル、テル＝アヴィヴの軍古文書館長に宛てた手紙を紹介しておく (Krasno 1992: 55-56)。

¹¹ Fritz Kauffmann, 'Die Juden in Shanghai im 2. Weltkrieg: Erinnerungen eines Vorstandsmitglieds der Jüdischen Gemeinde', *Bulletin of Leo Baeck Institute* (73), 1986.

1942年8月、柴田がスピールマンの自宅にユダヤ代表者たちを集めて会合を行った。彼いわく、日本当局がドイツ側の圧力のもと、ユダヤ人らを揚子江河口の島に強制収容しようとしているので、なんとか日本側に働きかけ、これを阻止ないし緩和させなければならぬ。この情報リークのおかげで、1943年2月まで居住制限措置を延期させることができたし、ハルピンのアブラハム・カウフマン博士に、代表団を組織し、東京の上層部に陳情してもらうことも可能となった。もっとも大きな変更点は、指定居住지가揚子江河口ではなく、上海の内部に作られるようになった点であった。

まとめ

第一のマーゴリスによる報告書を除く四つの証言は、出来事から10~20年を経てなされたものであり、また、それぞれ他の三者を参照せずに書かれたせいか、細部での食い違いも露呈させているが、そこへ、当時の柴田貢の立場、ならびにマイジンガーと上海の関係をめぐるわれわれの予備考察を合わせて、以下のような推論をまとめ上げておくことができるだろう。

(イ) 年代的にもっとも古い、上記五つの証言のいずれにもヨーゼフ・マイジンガーの名が現れないことから、1942年夏、上海のユダヤ住民について何らかの措置を講ずるよう日本側に迫ったのが、東京から(一部によれば専用のUボートで)やって来たマイジンガーであったとする後代の記述は、「マイジンガーを囲んで行われた秘密会合の翌日、柴田は……」といった筋書きもともと、当時、現地ユダヤ居留民たちのあいだで「ワルシャワの屠殺人」についてさまざまに飛び交っていた噂が、戦後のある時期以降、回想や歴史描写のなかに紛れ込むようになった結果とみなすのが至当である。むしろ、前年のトレビチュ＝リンカーン会談の後、ヒムラー、ハイドリヒから「外交に首を突っ込むな」との叱責を受け、さらにゾルゲ事件により、SS中枢部のみならず、東京、上海いずれのドイツ代表部でも人望を損ねていたマイジンガーが、ドイツないしナチスの名において、上海の日本軍政当局になんらかの提言を行う立場

にあったとは考えにくい。

(ロ) たしかに、時間的にもっとも出来事の発生に近いマーゴリスの報告書のなかで、すでにペリツが、ユダヤ人を船に乗せて沈めるといった具体的手法に言及しているが、それはマーゴリスをつうじてアメリカ世論に扇情的に働きかけようとするペリツの意図的発言であった可能性が高い。証言3ならびに5にあるとおり、当時、日本側が講じようとしていた「過酷な措置」とは、実のところ、揚子江河口の中洲ないし上海市内の特定の地区への集中（太平洋戦争開戦後、アメリカ人、イギリス人、オランダ人などの敵性外国人集団にも講じられようとしていた措置）であり、証言4に見られるような集団的殺害計画は、やはり1942年時点ですでに流言、風評としてあったものが、一定の時間をおき、ア・ポステリオリに回想のなかに取り込まれた結果ではなかったか（さもなければ、逆に3、5の証言者が「過酷な措置」として絶滅計画のことを回想していない事態の方が説明困難となる）。

(ハ) 総じて、上記の証言からは、ドイツ側から上海の日本当局に対し、マイジンガーならずともほかの誰か（たとえば「プットカマー」なる人物）を介して、現地ユダヤ居留民についての措置を急がせる「圧力」が実際にあったことがうかがわれる。これは、先立つ42年5月7日、在ベルリン大島浩大使から東郷茂徳外相宛の報告に記されているとおり（阪東2002：299）、その頃、ドイツの東部占領地域大臣アルフレート・ローゼンベルクから大島に対し、上海のユダヤ住民はいずれ厄介の種になるから、早期に隔離した方がいい、との進言がなされたことも連動していると見て間違いあるまい。ただ、同種の進言、忠告がどのような経路で、上海ドイツ代表部の誰を仲介としてもたらされたのか、といった具体的な側面は未解明のままである。また、その後、日本側がドイツの示唆や指示のもとで事を運んだ形跡はなく、翌43年2月の「指定居住区」設置準備も、ドイツ側には一切知らされぬまま進行していくこととなる（Freyeisen 2003：461）。

(ニ) 最後に、日頃から親しく行き来していた現地ユダヤ組織の代表者たちの身を

案じ、耳にした不穏な情報を彼らに伝えた柴田貢、ならびに先立ってペリツに同様の情報を漏らしたという「イノウエ」なる日本人将校の友情心、思いやり、ヒューマニズムに疑問の余地はない。ただ、当時、ユダヤ人集団に迫っている実際の危険が、ナチス式の絶滅政策であったのか、あるいは現実に翌43年2月から実施されることとなる指定居住区への集中であったのかによって、当然、彼らの「恩人」としての顕彰のされ方も別様とならざるを得まい。

翻って、日本の軍政・治安当局の目からすれば、柴田が取った行動は、海軍武官府特別調査部関係者ないし外務省囑託として、職務上知り得た情報を私的な場で流用する守秘義務違反の名に値するものであったことは否めず、彼がユダヤ人代表者ら数名とともに「ブリッジ・ハウス」の憲兵隊本部に連行され、厳しい取り調べの対象とされたのも避けがたい成り行きであった。もちろん、その際、別の文脈で親中・反日活動の嫌疑をかけられていたロシア系ユダヤ人ボリス・トパーズに対し、日本憲兵隊員らから加えられた、のちに後遺症を残すほどの暴行（上記、証言4を参照）については、振り返って、その悪質さが厳しく指弾されなければなるまい。

また、上の一連の証言からは、柴田貢が、ドイツ当局から日本当局に「圧力」がかけられるようになったことに加え（あるいはそれ以上に）、日本側に、その「圧力」を利用してユダヤ居留民の処遇を苛酷な方向へ動かそうとする強硬派、過激派が現れ始めたことを憂慮している様子が読み取れる。上海海軍武官府にあって、現地ユダヤ居留民の処遇を一手に引き受ける特別調査部に柴田は身を置いてきたわけであるが、当時、犬塚惟重から実吉敏郎へ責任者の交代があったばかりの同調査部の内部で、一体何が起きていたのか、今後、可能な限り解明していく必要がある。それが畢竟、「日米開戦後の日本は上海のユダヤ居留民をどう扱おうとしたか」という究極の問いへの答えに直結することになるろう。

*

本稿で得られた観察と推論にもとづき、次に求められる作業は、1942年夏、上海での出来事に直接・間接に関連する証言、記録を日本国内からも発掘し、正しく位置づけることである。そのように、日本に直に関係する歴史事象について、国外の資料と外国語による先行研究にばかり依存するのではなく、日本の内部からも一次素材を提供、発信していくことをつうじて、上海ユダヤ史研究の真の意味における国際性、越境性に資することになるだろうからである。

査読者：宮澤 正典・編集委員会

*本研究はJSPS科研費、平成29～32年、基盤研究(C)(1) 課題番号17K02041の助成を受けたものである。

文 献

- 犬塚 1982：犬塚きよ子『ユダヤ問題と日本の工作——海軍・犬塚機関の記録』、日本工業新聞社、1982年。
- ヴィッケルト 1991：エルヴィン・ヴィッケルト『戦時下のドイツ大使館——ある駐日外交官の証言』（原著1991年）、佐藤真知子訳、中央公論社、1998年。
- 上田／荒井 2003：上田浩二、荒井訓『戦時下日本のドイツ人たち』、集英社、2003年。
- 関根 2010：関根真保『日本占領下の「上海ユダヤ人ゲットー」——「避難」と「監視」の狭間で』、昭和堂、2010年。
- トケイヤー／シュオーツ 1979：マーヴィン・トケイヤー、メアリー・シュオーツ『河豚計画』（原著1979年）、加藤明彦訳、日本ブリタニカ、1979年。
- 阪東 2002：阪東宏『日本のユダヤ人政策 1931-1945——外交史料館文書「ユダヤ人問題」から』、未来社、2002年。
- 丸山 2005：丸山直起『太平洋戦争と上海のユダヤ難民』、法政大学出版局 2005年。

- Dicker 1962 : Herman Dicker, *Wanderers and settlers in the Far East: a century of Jewish life in China and Japan*, 1962.
- Freyeisen 2000 : Astrid Freyeisen, *Shanghai und die Politik des Dritten Reiches*, Wuerzburg, Koenigshausen und Neumann, 2000.
- Kranzler 1976 : David Kranzler, *Japanese, Nazis & Jews: The Jewish refugee community of Shanghai, 1938-1945*, Yeshiva University Press, 1976.
- Krasno 1992 : Rena Krasno, *Strangers Always: A Jewish Family in Wartime Shanghai*, Berkeley, Pacific View Press, 1992.
- Ristaino 2001 : Marcia Reynders Ristaino, *Port of Last Resort. The Diaspora Communities of Shanghai*, Stanford University Press, 2001.

Was there a plan for Jewish extermination in Shanghai
under Japanese military rule?

— Around Mitsugi Shibata and Josef Meisinger —

Kenji KANNO

In the exhibition gallery of Sydney Jewish Museum, the images of two Japanese ‘Righteous’ hang next to each other: one is Chiune Sugihara (1900-86) now famous the world over, and the other is Mitsugi Shibata (1910-77) who, in contrast, has remained entirely obscure even to the Japanese public. Much of the literature produced to date on Jewish residents in wartime Shanghai, however, has celebrated Shibata for saving over 20,000 Shanghai Jews from an egregious extermination plan, ostensibly elaborated by S. S. Colonel Josef Meisinger.

Far from refuting the humanitarian aspects of Shibata’s actions, this article attempts to reconstruct the events in which he was involved in a different way to that of existing works, notably *The Fugu Plan* (1979) by Marvin Tokayer and Mary Shwartz.

Using testimony left by Shibata’s widow as well as some diplomatic archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan, the present account will provide a unique insight, from within Japan, into the reality of the ambiguous ‘Shibata Affair’, which took place during the summer of 1942 in Shanghai.